

きやしゃな体格ですが病身らしい様子はなかった。色白でほんとうに坊ちゃん坊ちゃんした人で、弱そうではなかったが、普通の農家の子とちがい頑丈ではなかった。」（昭和50年5月5日NHK静岡局発全国放送「せいくらべ海野厚」でのインタビュー再録）

▽明治40年（1907）

2月13日・初代生まれる。

3月・村立西豊田小学校尋常科（第四学年）卒業。

4月・同校高等科第一学年入学。

前記小田重太郎の談話によれば、坊ちゃんタイプのおとなしい少年が想像されるが、長ずるにつれよく悪戯もしたようであり、現存の2枚の写真に見るこの当時の厚一は、むしろ悪戯好きの顔立である。

「夏休みよく泊りがけで曲金の家に行き、厚にいさん、亮兄さん、欣也兄さんと遊んだ。屋敷内に幾棟かあった倉の壁に花火を仕掛けて遊ぶうち、次々と火が走りはぜる音にお父さんが驚き、大声で使用人達に消させた。そういう時、厚にいさんと欣さんはいちはやく逃げてしまい、そういう時いつも亮さんがお父さんにつかまって、きつつい声でどん叱られていた。」（母方の従弟天野致夫談。）

▽明治42年（1909）

1月21日・千々代生れる。（大正15年7月15日歿。行年18歳）

3月・豊田村立豊田小学校高等科第二学年修了。

4月・豊田村立尋常高等小学校高等科一学年入学。

この頃母の指図で、学校が退けると英語を習いに、生家からは4キロの道を静岡市の濠端にあった静岡英和女学校へ毎日通った。（「風の中の唄―美しい思ひ出―」参照）

▽明治43年（1910）

3月・豊田村立尋常高等小学校高等科一年修了。

4月・静岡県立静岡中学（現静岡高校）入学。その報告がてら母の実家に遊ぶ。その折の写真一葉。母方の祖母えみ、曾祖母みま、叔母きの、叔父恬夫妻、従弟致夫、厚一のうしろは母遊佐。（5頁写真参照）

5月5日・祖母米子死去、行年72歳。

8月12日・満14歳。

10月・「明治四十三年十月写ス」と裏書きのある写真一葉。（写真6頁）後列中央が厚一であるが、不審なのは、すでに静中一年生であるはずの厚一がかぶっている帽子の記章が、小学生の弟達と同じものに見える事。この時厚一はまだ小学校高等科在学中だったのでだろうか。それとも裏書きの年数が誤っているのか。で、なおよく見ると、記章の上に帽子のあごひもが引きあげられていて、あたかも記章をかくす形になっているのに気付く。自然にそうなる場合もあるが、これは厚一自身の故意によるのではないかという気がする。理由は確定できないが、悪戯好きな少年をここに想定することは無理だろうか。

明治29年―43年の14年間、厚一14歳までを「曲金時代」と呼び一くぎりとするなら、めぐまれた環境にあつて豊かな夢がはぐくまれた、幼年期少年期がそこにあつたことができよ